

在郷町の天王祭礼

桐生新町と大間々町の事例から

板橋春夫

Tenno-sairei in Zaigo-cho: from the Examples of Kiryu-shinmachi and Omama-machi

はじめに

- ① 「桐生の里ぶり」にみる天王祭礼
- ② 市神の御輿と獅子頭
- ③ 桐生新町の天王祭礼と屋台
- ④ 大間々町の天王祭礼
- ⑤ 伝統的祭礼からイベント的祭りへ
おわりに

【論文要旨】

桐生新町の天王祭礼は由緒ある祭礼で、市神は桐生織物と深い関係にある。御旅所は当番町の天満宮寄りに安置するのが習わしであった。桐生新町では明治三十年代まで鉦や屋台を引き回していたが、電灯線が引かれ渡御に支障が出るようになって中止となり、御輿も現在廃止した。近世期のにぎわいぶりは彦部信有「桐生の里ぶり」に詳しいが、現在、その面影を見出すのはむずかしい。そこで隣接する在郷町である大間々町の天王祭礼でその様子を見ていく。桐生新町の御輿は「天王伝右衛門」という人物がかつて掌握していたが、何らかの理由で退転。正徳二年（一七一二）に江戸の職人が御輿を製作。桐生新町の御輿は大間々へ回っていたという。

大間々町の天王祭礼は、寛永六年（一六二九）、京都から八坂神社の分霊を市神として勧請し、三丁目大泉院内に祀ったのが始まりである。仮御輿だったので万治元年（一六五八）に新規製作。町の大火で消失してしまい、寛政三年（一七九二）に新規

製作した。祭日は徳川家康が関東に入った際に絹織物を献上したところ、それが勝利の吉例になったのにちなむというものである。

大間々町の天王祭礼に関する聞き書きを行い、具体的な祭りの様子を記述した。全国各地で伝統的祭礼が衰退し、代わりに行政主導型の新しいイベントとして改編する動向がある。桐生市や大間々町の天王祭礼はそれぞれ高度経済成長期に大きな変化があった。本稿では大間々町の天王祭礼を聞き書きと地元紙『東毛タイムス』の記事を利用して変化を探った。

はじめに

桐生新町は、天正十九年（一五九二）から慶長十一年（一六〇六）にかけて幕府代官大久保長安の手代大野八右衛門が荒戸村に創設した在郷町で、天満宮を起点に町立てを行ったと伝える。天満宮は梅原天神とも呼ばれ、桐生新町の総鎮守的な性格を持つ。当初は下久方村梅原に鎮座していたが町立てに際し遷座したといわれる。旧暦十一月初の酉から中の酉まで市が開かれており、この市が五、九の市に発展していった。

町の成立当初は一丁目から四丁目までであったが、慶長年間に五、六丁目を開発している。慶長十年（一六〇五）には浄運寺を新宿から移転し、同十八年に稲荷神社をさいかち原から遷座し、現在の桐生市街地の基盤が整えられた。このように一丁目から六丁目までは、初期のまちづくり以来の町内であり、本稿で取り上げようとする天王祭礼は、この六町内が交代で天王番となつて祭礼を執行してきた由緒ある祭礼で、御旅所はその町内の一番上、すなわち天満宮に近いほうに安置する習わしであった。また、市神天王は桐生の織物と深い関係にあることはいふまでもない。

本稿では、隣接する在郷町である大間々町の天王祭礼と比較しながら在郷町桐生新町の天王祭礼の特色を明らかにしたい。

①「桐生の里ぶり」にみる天王祭礼

桐生新町の天王祭礼は、明治三十年代まで鉾や屋台を引き回していたが、電灯線が引かれ渡御に支障が出るようになって中止となった。御輿も現在は廃止されている。そこで、まず近世における桐生新町の天王祭礼がどのようなかを明らかにしておかねばならない。残された断片

的な近世史料には生き生きとした祭礼の記述はみられないが、幸いにも山田郡広沢村（現桐生市広沢町）の彦部信有が著した「桐生の里ぶり」に、天王祭礼のにぎわいの様子が詳細に描かれている。信有は天保三年（一八三三）に六十七歳で没しているから、当時の記録として貴重である。次にその一部を紹介しよう。

さて午の時に天王の神輿渡し奉る、まづ鉄棒を両側に引、次に大なる幣を持ち、其跡に神馬をそ引にける、此神馬を引ものは、二丈あまりに手綱をつけ、塗笠をかぶり、白きちはんに紫ちりめんの丸くけしめ、同じ色のたすきをかけ、二丁余り人馬のあと、左り右りに立ならび、わり竹をもて人をはらい、一丁のうち四五十間馬を走らせ、其のあとに万どうを子どももたせ、櫛をわくに立てかつぎ、次に神輿白はりを着てかき奉り、神主は袍の装束して馬に乗御供すれば、又町うちおとおみな子どもまで、おもしろい御供す、また里よりくる人も、ひとつになりて行きかえば、大路にすきまはあらざりし、舞台は町ごとに稽古場てうありて、上と下とに引わかれ、処さためず狂言す、〔桐生市史別巻編集委員会一九七一―一九八九〕

これによると、当時は神馬が出ていたことが分かる。桐生新町の天王祭礼には明治二十年（一八八七）ころまで神馬を走らせていたが、馬の調達などの問題もあつて出さなくなつてしまった。

隣接の大間々町では戦前まで神馬が出ていた。一時途絶えたが数年前に復活している。馬を走らせることで道を清める役目を果たすと考えられた。この神馬が走った後、きれいに飾り立てた山車が出る。子どもたちが牽くもので、そのあとから町内の万灯、櫛、神輿と続く。町内には舞台が設けられ、狂言が催されるといふ豪華さである。この日は桐生はもちろん近隣からも大勢の人数があつたことを記している。

②市神の御輿と獅子頭

1 桐生新町の御輿

桐生新町における市神の創設は、天正四年（一五七六）という説があるが、それでは町立てよりも古くなってしまい、時期的な整合性がみられない。元禄二年（一六八九）に市神の祠を建設しているから、もちろんそれ以前に創設されたことは間違いない。市神の所在地は本町三丁目衆生院の本堂前で、明治維新で廃寺となり、明治四十一年（一九〇八）に市神のほか末社は一緒に美和神社へ合祀された。

御輿について「岩下旧記」は次のように記している。

【史料1】

正徳二年世話人岩下三郎右衛門ならびに富沢町、かざり屋八兵衛世話を以て、町中奉加いたし今の御輿出来申候、古祭は天王伝右衛門という者支配致し、伝右衛門諸敷退転に及、夫より衆生院の屋根に御輿を入置奉候、今の御輿出来候ても入置可き処無く、四丁目伊勢屋の蔵を借入置、其後今の衆生院寺内へ元文三年戊午に御蔵を作り入奉也（中略）大間々村の市なども、六月二十四日祭礼の節は、天和元年までは当方より天王御輿を二十三日の晩に守り奉り、翌二十四日に相廻し、直ちに其夜当方へ守奉り、二十五日の当地祭礼を相廻り被遊候（桐生市史別巻編集委員会 一九七一 九八六）

これによれば、古くは「天王伝右衛門」なる人物が天王祭礼を掌握していたらしいが、天王伝右衛門が何らかの理由で退転したという。その後、正徳二年（一七一二）に江戸富沢町の飾り職人八兵衛が御輿を製作した。この史料から判明するのは、天王伝右衛門の退転を契機として、御輿は衆生院の屋根裏に保管されるようになったということである。

天王伝右衛門の時代には、桐生新町の御輿は大間々へ回っていた。天和元年（一六八一）までは、六月二十三日の晩に御輿が繰り出され、翌二十四日には桐生新町へ戻るといったものであった。翌日の二十五日には桐生新町を回ったのである。

大間々町では、古くは大間々町の御輿を桐生新町に貸していたという逆の話も伝わっており、桐生新町の御輿が大間々町へ貸し出されていたという記録の真偽は不明である。少なくとも大間々町にはそれを傍証する史料は存在しない。桐生新町と大間々町の中間地点に天王宿という地名がある。桐生新町から大間々町へ御輿を貸し出していた時代、途中に天王御輿が休む御旅所があったから付いた地名と考える人もいる。しかし、ここには天王院という寺院があり、さらに八坂神社が祀られていたことを考えると、御旅所があったから付けられた地名であると単純に判断できない。天王宿は川内村の分村で、八坂神社は本村のほうを向いて建てられていた。

次に「市神」について文化四年（一八〇七）の史料をみると、

【史料2】

乍恐

東照大権現・母衣輪権現・牛頭天王

右三社を奉唱市神与往古より毎年御祭礼之節附祭り二子供踊り仕候

〔書上家文書〕A六六三

とあり、東照大権現・母衣輪権現・牛頭天王の三社を総称したものが「市神」であると説明される。

文化年間には、いわゆる市神と牛頭天王が一緒になっていたと考えるのと分かりやすい。市神は天王御輿蔵と並んで三丁目東に祀られていた。元文元年（一七三六）の「天正遺事」という史料に「御輿倉」の記述が見える。

〔史料3〕

元文元年（一七三六）

四丁目村田蔵へ二年置く。御蔵普請之節八村田跡伊世屋蔵江安置す例なり（中略）

元文三年六月

牛頭天王御輿蔵、三丁目衆生院地内へ造立。金子太郎衛・木村重右衛門・新居次兵衛・木村市兵衛・新居次左衛門

正徳二年（一七一一）に御輿が完成してから元文三年（一七八八）に御輿蔵が三丁目衆生院地内に建設されるまで、御輿は村田蔵へ二年、そしてその後は四丁目伊勢屋の質蔵を借りて保管されていたという。伊勢屋の質蔵に神様を入れておいたので、町民は質代金がたまるだろうなどと悪口を言った。このころ流行した地口（悪口歌）に「御輿の身請け、天狗にもできかねる」というのがある。天狗とは御輿製作に奔走した岩下三郎右衛門のことで、天狗のように鼻が高かったという。

ちなみに伊勢屋の蔵は四丁目の塚本酒店の上に当たる場所にあった。なお、この御輿に関する俗信として御輿をもめばその年は運がよい、あるいは小児の衣類を身につけて御輿をもめば小児が丈夫に育つと伝えられていた（粟田一九八〇 八七）。

2 大間々町の御輿と獅子舞

大間々町の天王祭礼（祇園祭り）は、寛永六年（一六二九）一月八日、京都から八坂神社の分霊を市神として勧請し、三丁目大泉院内に祀ったのが始まりである。同年六月二十四日の祭礼に神霊の渡御を行った（大間々町誌編さん室一九九六 八）。同年、栃木県皆川村の宮大工に依頼して飯御輿を作った。万治元年（一六五八）、星野庄左衛門が代官の許可を得て絹市を開き以来繁昌した。この年に沼田の材木商細内彦兵衛の世話で御輿を新調することになった。細内は商用で江戸往復の途中、大間々

に宿泊することが多かった。そこで細内の口利きによって江戸の宮大工が御輿を作ることになった。

万治元年（一六五八）に作られた御輿は、残念ながらたび重なる大間々の大火で焼失したようで、寛政三年（一七九一）に御輿を新調している。御輿の修復時、御輿の屋根裏に墨書銘があったので判明した。これにはそのほか御輿の回りに古い鏡が使われている。火災にあつて焼失を免れたものの一部であろうという。

天王様を祀る八坂神社は、明治四十四年（一九一一）まで現在の三区公民館あたりで所在していた。神社合祀の際に神明宮へ合祀され、神明宮境内へ移転した。現在の獅子頭一対は、文政十二年（一八二九）の銘がある。その年に大間々町が町号を認められており、その祝いに新調したものであることが分かる。毎年神輿と共に全町を一巡する習わしとなっている。「大泉院日記」の文政十二年（一八二九）六月二十四日の条に次のような記事がある。

獅子頭之義小林浅右衛門殿出府之節、町内一統世話人中頼ミ二付、求候而舟つみにいたし候所間ニ合兼迎に行、平塚川岸より伝馬舟ニ而乗下し、栗橋迄行合候故、右場所より揚ヶ昨二十三日足利町泊りニ而九ツ頃着、但し右獅子頭当年新規ニ求候事故、当番三丁目若者并子供ニ至迄きやり相習候所、昨夜迄着無之ニ付とても間ニ合兼候半与存、昨二十三日夜中桐生新宿之獅子頭借り来り候所、御神輿御立子前ニ至り着候故皆々一同大悦ひ、

これによると、小林浅右衛門に購入を依頼した獅子頭が祭りの前日に届かず迎えに行った。一方、間に合わないかも知れないから万全を期して桐生新宿の獅子頭を借りてきたが、御輿の御立ち前によく獅子頭が間に合つて到着したので大喜びをしたという（大間々町誌編さん室一九九六 二二〇）。

③ 桐生新町の天王祭礼と屋台

1 祭礼の日時

一般の祇園祭りは六月二十七日であるが、桐生新町の場合は少し日程がずれている。文化十年（一八一三）の「村鑑帳」にはその理由が次のように記されている。

[史料4]

市神母衣輪権現之社御神事、毎年正月廿三日、織女之社、毎年七月七日二短冊を捧候神事、市神牛頭天王鸞輿入土蔵御社御神事之節、御旅所六町二而年番二仕、当候町二而拵、六月廿一日二御輿御旅所江御鎮座被遊、廿五日二御婦被遊候、御祭礼ハ六町思々ニ致、屋たひ狂言仕候町も御座候、或ハ通り祭り仕候町も御座候、其年変応シ、先年より市祭り致来候、六月廿一日より廿四日迄相勤申候、依之遠近より見物ニ罷出賑申候（書上家文書「A六九七」）

この記録内容は安永九年（一七八〇）の「桐生新町書上帳」とほぼ同じものである。この文書から、それぞれの祭日が分かる。すなわち、母衣輪権現（ほろわごんげん）の祭日は一月二十三日、織女社（しよくじよ）の祭日は七月七日、牛頭天王（ごずてんのう）の祭日は六月二十一日から六月二十五日であった。御旅所の設営は六町が年番で務めており、六月二十一日に市神の御輿は御旅所へ出て、二十五日には帰るといふ。祭礼は「六町思々ニ致、屋たひ狂言仕候町も御座候、或ハ通り祭り仕候町も御座候、其年変応シ」で執り行われてきたが、「先年より市祭り致来候、六月廿一日より廿四日迄相勤申候」ということであった。それは次のような理由による。直接に説明した文書は文化四年（一八〇七）の文書で二通あり、微妙に違うのでそれぞれ紹介する。

[史料5]

桐生新町之儀、桐生領壹万三千石之親郷にて、天正十八年関東御入国之砌より 御旗絹奉献上、 御勝利之御吉例ニ相成、慶長五年厩橋御城主平岩七之助様より被仰渡、桐生領五拾四ヶ村にて御旗絹毎年式千四百拾疋宛献上被仰付候、以来右之通御旗絹為冥加年々献上仕来候処、明曆年中御代官諸星庄兵衛様御支配之節より代金納二被仰付、同年六月廿三日、右 御旗絹代始而金納仕、依之其節より六月廿三日を牛頭天王祭礼与相定（書上家文書A六六三①）、文化四年「乍恐以書付奉願上候」

[史料6]

明曆年中、御代官諸星庄兵衛様御支配之節被仰出候者、御旗絹致献上候以来絹捌方宣敷、当所繁昌成儀偏ニ御恩徳ニ候得者、先年初而御旗絹致献上候日を祭日と相定、当所産業永々繁昌五穀成就之ため、祭礼可仕旨厚キ思召を以被仰付候、但し先年六月廿三日初日、御旗絹献上仕候故其日を祭日と相定、右市神三社御祭礼執行申候（書上家文書A六六三②）、文化四年「乍恐以書付奉願上候」

この二つの文書は、記述に若干の相違があるが、「史料5」には「天正十八年関東 御入国之砌より 御旗絹奉献上、 御勝利之御吉例ニ相成（中略）御旗絹代始而金納仕、依之其節より六月廿三日を牛頭天王祭礼与相定」、また「史料6」には「御旗絹献上仕候故其日を祭日と相定」とあり、祭りの由緒を徳川家康へ「御旗絹」を献上したところ、それが勝利の吉例になったというものである。期日が確定してくるのは金納に切り替えた日としており、その時期は明曆年間（一六五五～一六五八）である。

2 祭礼の日程

祭礼の日程を安政五年（一八五八）「天王丁仕方書」で見ると次のよ

うである。

〔史料7〕

五月十日以前 町内一統評議、役前内うかがい、其上他町廻り

六月一日 大評議、役割致し、札配申可し

(神馬の予約・飾りの用意・大団扇・提灯高張・薦に半天誂え・諸帳面用意・櫛の準備・山車・万灯の用意・油紙・賽銭大桶の用意)

六月十八日 幟立て

六月十九日 御旅所取立

六月二十日 化粧場取極置

町内大供餅

六月二十一日 御輿請待

町々大方御迎に出べし

御陣屋より御紋付御幕、高張提灯借用、散銭箱拵え

六月二十三日 山車神馬等の入足集め

八ツ時 渡御、御陣屋、町役人、百姓代、町火消、大宮司へ

通達

六月二十四日 千秋楽、役元へ届け

六月二十五日 御輿遷宮御送り

大宮司礼、御備配、御陣屋、名主、年寄、組頭、総町火消へ〔粟田 一九八〇〕

この祭礼に呼応して、文政十三年(一八三〇)の「書上家文書」によると、奉公人の休日(六月二十一日)昼ころから二十四日までの三日半であった(文政十三年「書上家文書」『群馬県史資料編』一五巻、五八〇)。祭りを見物する人々がいかに多かったかが分かるであろう。

3 付け祭りとしての屋台

桐生新町四丁目(目)の屋台は磯部庄七が設計した。そのために祭礼の終了

日には浄運寺境内にある磯部家の墓に詣でるのが習わしであった。桐生新町では、祭り間近になると町役人が見回って、屋台を運行する際に邪魔な庇を取り払わせていた。併せて屋台通行に伴う庇の撤去を行った。ここで屋台に関わる事件簿の一部を一覧してみる。

●天保元年(一八三〇) 領主忌中のため中止。

●天保六年(一八三五) 雷雨で屋台立ち往生

●弘化元年(一八四四) 幟新調。名主による屋台手踊り許可運動。

●嘉永二年(一八四九) 屋台引き下げ一件、庇一件、人足代一件

この年は事件が多かった。〔木本 一九七〇 二二四～二二七〕

●嘉永四年(一八五二) 天王祭礼延期

〔但廿三日は天王宮御幸無之尤大水ニ付道甚だあしく、誠廿二日の

夜宮も相止メ位の事故、廿四日ニ天王様御幸也、桐生始めしより此

日延ル始めて也〕〔粟田 一九八〇〕

●嘉永五年(一八五二) 屋台潰れ一件

〔六月廿四日祭礼、夜入山前エ四丁目屋台上より下り車めり込たお

れみぢんに相成り候、扱々気の毒也、当町の珍事にして夜明方に取

片付けに相成候〕〔粟田 一九八〇〕

④大間々町の天王祭礼

1 天王祭礼の様子

大間々町の天王祭礼は「オギヨン」の通称で親しまれている。この天王祭礼は世良田祇園(新田郡尾島町)や沼田祇園(沼田市)と並び称され、昔から近郷近在に知られた祭礼であった。祭りが行われる時期は三日間のうち一日は必ず雨になると伝承される。

祭りの具体的内容を見ていく。まず祭りに先立って本町通りを大櫛で

清める。櫛は毎年鳶の頭が調達していたが、後には神社の境内から根っ子ごと掘り出して木箱に入れて四人で担いだ。大櫛が回った後、神馬が全町を駆けめぐることになっている。この神馬は鹿毛の馬に限られていた。近年復活した神馬はできるだけ伝統ののつとるようになっているといふ。『大泉院日記』には「かけ馬」などの記事が散見する。たとえば、弘化四年（一八四七）六月二十三日の記事に「かけ馬を先江乗り候」などの文字が見える（大間々町誌編さん室 一九九六 三四七）。嘉永元年（一八四八）六月二十三日には「かけ馬も暮方二至り有」、同二十五日に「かけ馬六丁目有」（大間々町誌編さん室 一九九六 三六二）とある。

また、天王様を祀る当番町内は当番町あるいは天王町と呼ばれ、祭りに先立って仮宮を作ることになっていた。江戸時代の祭礼は六月二十四日から三日間行われたが、天王町が六月十四日に仮殿を設け、そこへ御輿を出した。たとえば文政二年（一八一九）六月十四日の項に「十四日、晴天、例年之通り、天王宮御旅所江御出、八ツ頃より雨ふる、七ツ頃大雷鳴後晴れる」（大間々町誌編さん室 一九九六 四二二）とあり、文政七年（一八二四）の記事には「十四日、神輿、六丁目仮殿江御出」と記されている（大間々町誌編さん室 一九九六 八三三）。

戦前は、上三町と下三町が交互に天王町をした。祭日が八月一日になってからは、仮宮は七月二十日に天王町へ設置された。これをお仮屋掛けと呼んだ。天王町から人足が出て、仮屋材料を準備するが、お仮屋は町内境の路上に立てるのが古式であり、仮宮の参道には渡良瀬川から採ってきた川砂を敷いた。

そして天王町が神明宮の御輿庫から天王様を仮宮へ移した。二十二日の朝は宮出しといって、天王様を仮宮へ移す儀式がある。町民は祭り当日に必ず仮宮へお参りするものであった。天王町では、仮宮ができることになるので例年よりもぎやかになった。

2 祭りの担い手

祭りの主体は常務員で世話役とも呼ばれる。任期は一年であるが、常務員の成り手をさがすのは大変だった。五丁目では、常務員は祭り専門の役員四人で構成され、祇園祭り全体の責任を持たされた。寄付集め、町内の区費の管理もしたり、祭りに関わる期間が長すぎて敬遠されがちであった。そのために四丁目と五丁目は、この常務員制度を廃止した。天王町の常務員になると、祇園祭りで喧嘩騒ぎがあると仲裁ができる力量が求められる重要な役割であった。

また、ガイコウ（外交）と呼ばれる役割もあった。ガイコウには町内の若い衆が選ばれた。若い衆は、祇園祭りの実際的な主役である。祭りの二日目に塩振りがあるが、このときに味噌こしの籠を持って本通りに出ている人々から賽銭を集める係も若い衆が担当した。また、芝居小屋の設営や片付けなども若い衆の仕事であった。よその町内の山車がその町内を通過するときは若い衆へあいさつがある。

町内にいる鳶のカシラが山車の組み立てをしてくれた。カシラがいないくは成り立たないといわれるほどであった。カシラは祇園祭り行事全体に関わる。町内お揃いの派手な浴衣を作るが、浴衣は毎年変えるものであった。カシラはそれぞれの町内に住み、祭りはもちろん町内の諸行事にいろいろと通知を回したり重要な役割を担った。カシラは八坂神社の総町寄合の通知を出し、接待用のお茶や菓子を用意した。また、予算書、稚児の仕度の見本、常務員の花笠・胸章の見本も用意した。十五日の会議ではカシラは各町内に御神灯のある場所、仮屋前の長提灯を用意しておく。仮屋の設営はもちろん、神輿を神明宮から出して設置し、果物などを供えておくのもカシラの仕事であった。神主に切ってもらう幣束用の西内紙、半紙などを用意しておく。二十三日の朝から神主がくるのでカシラは戸締まり提灯の出し入れをした。いずれにしても段取りの

ほとんどをカシラが担当した。

祇園祭りの第一日目は、天王町の山車に獅子頭を載せて仮宮の前で有志が神事に立ち会った。神主による神事がひと通り終わると、天王町の祭典委員と常務員は、各町内の祭典委員たちと常務員たちを集めて料亭で宴会を催した。これを「総町つきあい」と呼んだ。カシラは、町名の入った提灯を持ち露払いをして各町の祭典委員と常務員を送る。祭典委員と常務員は盛装して料亭に集まった。この総町つきあいの宴会が首尾よくいけば二日目の神輿渡御もうまくいくと言われた。そのために、この総町つきあいの宴会は天王町の役員にとつてたいへん緊張したものである。

祇園祭りは、天王町あるいは当番町と呼ばれる町内が中心になって祭りを執行する。天王町には一丁目から六丁目までの六町が交替で務めた。一丁目から三丁目までを上三町、四丁目から六丁目までを下三町と呼んだ。上と下から交互になるように天王町を務めてきた。上三町と下三町は祭りになるとどういふ訳か、あまり仲が良くなかった。なお、七丁目はワリダシ（割り出し）と呼ばれ、祇園祭りの圏外に置かれ、天王町を引き受ける資格が与えられなかった。紆余曲折を経て、昭和十九年七月一日、神明宮の総町寄合の席上、七丁目が初めて天王町を務めることになった。戦争の影響で、実際に天王町となったのは昭和二十一年（一九四六）夏であった。なお、大正期のオギヨンは近在の人々を喜ばせるためのお礼のようであった。掛け小屋をやり、来る人に楽しんでもらった。当時はたかさんの人が足尾線沿線からやってきた。大正期には桐生よりもにぎやかな祇園として知られていた。

町内に山車があり屋台とも呼ばれた。祭りの最終日である三日目になると、天王町が各町内に対して祭りに協力してくれたお礼に山車を引いて歩いた。これを「お礼参り」と呼んでいる。このときに若い衆がその天王町を気に入らないときは通行止めなどの意地悪をした。そのために、

しかたなく裏通りを通ったこともあった。昭和七年（一九三二）の屋台転覆事件は犯人を捜したが見つからず、大間々町長は天狗の仕業であるうという粹な計らいで決着させた（萩原一九九二―一三三―二二八）。

⑤ 伝統的祭礼からイベント的祭りへ

1 祭りの変化は道路規制から

全国各地で伝統的祭礼から戦後の行政が主導する新しいイベントとしての祭りの動きがあるが、桐生市や大間々町の天王祭礼も大きな変化が見られる。ここでは大間々町の事例を紹介しておく。

大間々町の天王祭礼（祇園祭り）は、①昭和十七年（一九四二）に七丁目のワリダシが天王町となることのできた時期、②戦後の混乱期、③大間々祭りと一体化する時期、の大きく三つの時期に分けることができる。ここでは、③の大間々祭りと一体化する時期を地元紙『東毛タイムス』の記事をデータとして見ていく。

昭和二十八年（一九五三）の祇園祭りは、祭典当番が一丁目であった。全町あげての新趣向の花山車、芝居、のど自慢、稚児行列、仮装行列、花火大会など多彩な催しであった。商店街では福引きを実施し、特賞は水上温泉招待であった。上毛電鉄は電車と自動車、足尾線は臨時の汽車を増発した。各町内の出し物は、一丁目は芝居（上田敏子一座）、二丁目は素人のど自慢大会、三丁目は芝居（梅沢清一座）、四丁目は芝居（中村洋次郎一座）、五丁目は芝居（赤石須磨子一座）、六丁目は芝居（高浜守義一座）、七丁目は素人のど自慢大会であった（『東毛タイムス』三一―三三、一九五三年八月一日付）。

昭和三十九年（一九六四）に本町の道路規制が始まった。大間々警察署は交通事情から国道上の使用は好ましくないと自粛の要望を出した。

道路の公共性という立場から一時間一三〇〇台以上の自動車を通る大通りの実状により、祭りの自粛が強く要望され、その結果、舞台設置余興を取りやめたのである（『東毛タイムス』一九六四年六月二十八日付）。翌年も同様の交通規制が行われ、正午から午後十時までは大通りを全面通行止めとし、さらに山車、仮設舞台、出店などはすべて大通り東側に設けることになった。また、舞台は南向きにするようになった（『東毛タイムス』一九六五年八月一日付）。

昭和四十一年（一九六六）の当番町は四丁目であった。この年は仮設舞台、露店は大通りの西側に出すことが大間々警察署の指導で決められた。二丁目、八木節大会、四丁目が素人のど自慢大会、五丁目はエレキハワイアン大会などが催された（『東毛タイムス』一九六六年七月十七日付）。昭和四十二年も国道上の使用は好ましくないという立場から、警察署が道路の自粛制限を提案した。ラッシュ時の通行量は一時間四〇〇〇台となっている。そのために警察は大通りの舞台設置及び露店禁止を打ち出した。どのようにして舞台が設置されたのか不明であるが、この年の出し物は一区は奇術・漫才・歌謡曲大会（東京双葉会一行）とエレキバンドの演奏、四区は新舞踊・八木節・お神楽大会（東京舞踏団一行）、五区はエレキバンド・八木節大会、六区はゴジラ、エジラ、モストラ南海の大決闘などが催された（『東毛タイムス』一九六七年七月二十三日付）。昭和四十三年（一九六八）は、祇園祭りが例年になく盛大に開催できる見通しが多かった。五区が当番町で、夏までには大型自動車が行き交う道路が整備されるので祇園祭りはにぎやかにできそうだと報告されている（『東毛タイムス』一九六八年五月二十日付）。昭和四十四年（一九六九）の当番町は二丁目、「一日夜、神明宮社務所へ各町世話役、常務員が招かれ、当番町からつけ祭りを懇請された」とある（『東毛タイムス』一九六九年六月二十三日付）。この年の当番町は二丁目である。余興は二丁目の八木節大会、四丁目のエレキバンドとゴーゴー大会、五丁

目東家一行の色物などである。一丁目を除き、六町の山車が町内を練り歩く（『東毛タイムス』一九六九年七月二十八日付）。

昭和四十五年（一九七〇）には、祇園の囃子を保存すべく五丁目俱樂部が「祇園おはやし保存会」を発会した。毎月一回集まり稽古に励み、お囃子の保存に務めることになった。同年の当番町は六丁目であった。迎い番の三丁目から六丁目までは屋台や山車が出て太鼓のお囃子で賑やかである。一方、一丁目と七丁目は諸掛かりの課当金は出すだけで祭りへ不参加となった。昭和四十六年（一九七一）は、例年になく賑やかに行われた。当番町は三丁目であった。予算一三〇万円。余興は当番町の八木節大会、四丁目のど自慢大会、五丁目の移動バンド演奏などである。警察の協力で大通り四丁目大間々駅入り口から六丁目信号交差点まで車両通行止めとし歩行者天国に開放した（『東毛タイムス』一九七一年七月二十六日付）。

2 祭りの自粛と不参加

昭和四十七年（一九七二）は、七丁目が当番町であった。区長が飛行機事故で死亡するという悲しい事件があり、七丁目は祭りへの参加を自粛したところ、これに右へならえで各町も余興を中止することになった。さらに一丁目では、区民アンケートにより神明宮の氏子総辞退というハプニングがあり、二丁目、天王様は回れ右という事態になった。祭礼の存続維持が大きな曲がり角にあることを象徴する年であった。なお、この時点では、東通りは一丁目まで開通していない（『東毛タイムス』一九七二年七月三十一日付）。昭和四十八年（一九七三）から天王町を廃止することになった。飯宮はいままでのように天王町に鎮座するのではなく、町の中央など一定の場所に鎮座することに決まった。祇園祭りにおける天王町当番町の仕組みが大きく変化した年である。

このように、昭和四十七年の区長死亡に伴う余興自粛一件や一丁目町

内の神明宮氏子総辞退など、事件が続いていた。そのような状況下で、崇敬会を組織し会員募集をしたのである。崇敬会が従来のように行事を行い、付け祭りは各町内ごとに行うことになった。もちろん賛助金の集金方法をめぐって崇敬会に対する批判もあった(『東毛タイムス』一九七三年五月二十一日、七月二十三日付)。

一方、毎年十一月に開催されていた「大間々まつり」は、大間々町と町商工会の主催で行われてきた。祇園祭り同様に年々寂れていく一方で、何とかしようと協議が行われたが、この大間々まつりは中止にされた。祇園祭りと一緒にしてはどうかという意見が出されていた(『東毛タイムス』一九七三年五月二十一日、七月二十三日、九月二十四日付)。

そして、昭和四十九年(一九七四)三月に「大間々まつり」の開催時期を八月一、二、三日の三日間とし、祇園祭りと同日にすることで盛大な祭りをもくろんだ。つまり八坂祭典は崇敬会が担当し、大間々まつりの主催は町当局とした。祭典委員会を組織して対応することになったのである(『東毛タイムス』一九七四年三月十一日付)。昭和五十年から正式に大間々まつりとなった²⁾。

かつては祭典の当番に当たると、昭和四十年代で約一五〇万円の出費であったという。昭和四十八年に崇敬会が結成され、町内全戸が祭りを維持するのではなく、各家の自由にかかせることになったのは信教の自由の観点からであり、これは当番町が廃止となったための措置である。宗教色の薄いイベントとして再生した大間々まつりは、東の新道である通称「東伸通」がバイパスとして機能するようになり本町通りを通行禁止にできるようになったことの意味は大きい。

おわりに

現在の桐生まつりから、かつて近隣にその華美を誇った桐生新町の天

王祭礼を想像することはむづかしい。もちろん近世期に製作された屋台やお囃子は現在もそのままであるが、祭りのあり方は大きく変わってしまった。一方、大間々町の天王祭礼は桐生新町と比較すると古い形が残っている。戦時中までは割り出しと呼ばれ、一丁目から六丁目までの祭典組織に参加できなかった七丁目がよく悲願の参加ができるようになったものの、戦後の混乱期と高度経済成長期を過ぎたころの信仰心の消失と経済基盤の変質によって祭礼の維持が困難になる。その様子はある程度浮き彫りにできたと思う。今後は、近世期の桐生新町の各町内に遺された祭礼史料を発掘して生き生きとした祭りの様子を描き出すことを課題にしておきたい。

註

(1) 桐生天王祭礼については木本政雄、栗田豊三郎、加藤進康の先行研究がある。特に栗田は聞き書きも活用して詳細な報告をしている。

(2) 桐生祇園祭りは、大間々祭りに先だって、昭和三十九年八月から七夕飾り、八木節踊り、仮装パレードなどを盛り込んだイベント「桐生祭り」となった。(桐生市史別巻編集委員会 一九七一年 一九九六―一〇〇九)

参考文献

- 栗田豊三郎 一九八〇「桐生天王祭礼」『桐生旧記物語初編案郷華観』私家版
大間々町誌編さん室 一九九六「大間々町誌基礎資料7大泉院日記」大間々町誌刊行委員会
加藤進康 一九八九「桐生天王祭礼史年表」『桐生史苑』二八号、桐生文化史談会
桐生市史別巻編集委員会 一九七一年「桐生祇園」『桐生市史別巻』桐生市役所
萩原康次郎 一九九二「問々はゆりかご」講談社出版サービス
木本政雄 一九七〇「祇園祭礼秘話」『祇園祭礼年代記』『近世桐生夜話』桐生文化史談会

(伊勢崎市役所、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇一年三月三十一日受理、二〇〇一年九月四日審査終了)

Tenno-sairei in Zaigo-cho: from the Examples of Kiryu-shinmachi and Omama-machi

ITABASHI Haruo

Tenno-sairei of Kiryu-shinmachi is a festival of tradition, and its local guardian deity (市神) has a deep connection with fabrics made in Kiryu. Traditionally, *otabisho* (place for the portable shrine to stay) used to be placed near the *temmangu* of the *toban-cho* (the town in charge). In Kiryu-shinmachi, people used to pull *hoko* and *yatai* around until the Meiji 30s, but stopped when the electric wires became a hindrance to their procession, and *mikoshi* (the portable shrine) is no longer carried today. During the Meiji period, *shinme* (the sacred horse) also appeared in the festival. HIKOBE Nobuari described in detail how crowded the festival was in the early modern times in his “*Kiryu no satoburi*” (“The local way of life in Kiryu”), but today it retains little trace of its former florescence. Therefore, we will see how the festival takes place with an example of the Tenno-sairei of Omama-machi, a neighboring *zaigo-cho*. For the *mikoshi* of Kiryu-shinmachi, a person called “Tenno Den-emon” took the control of the *mikoshi*, but for some reason, it was transferred to another place. In Shotoku 2 (1712), a craftsman of Edo made another *mikoshi*, and the old *mikoshi* of Kiryu-shinmachi passed to Omama-machi.

For the beginning the Tenno-sairei of Omama-machi, the town invited a separate divinity of Yasaka Shrine in Kyoto as its local deity and enshrined it in “San-chome Daisen-in.” As it was a temporary *mikoshi*, a new one was made in the first year of Manji (1658). Then it was later destroyed in the conflagration of the town and reproduced in Kansei 3 (1791). For the festival day, the day on which the town dedicated silk fabrics to TOKUGAWA Ieyasu came to be admitted as a luck event for victory. So the day has been said to be the origin of the festival.

In this paper, the author wrote down what he heard about the Tenno-sairei of Omama-machi, describing the concrete situation of the festival. For the trend seen all over Japan, traditional festivals decline, while they are remodeled as new events on the initiative of the local administration. The Tenno-sairei of Kiryu City and that of Omama-machi greatly changed during the period of high economic growth. This paper searched the changes of the festival by what I have written down the interviews about the Tenno-sairei of Omama-machi and by the local paper “The Tomo Times.”